

石川県埋蔵文化財情報

第 28 号

巻頭図版（小立野ユミノマチ遺跡、宮の奥経塚）

平成23年度の発掘調査から……………所長 三浦 純夫…（1）

発掘調査略報

正院小路遺跡（珠洲市）……………（3）

七尾城跡（七尾市）……………（5）

千野遺跡（七尾市）……………（7）

花園・黒崎遺跡（七尾市）……………（9）

福井ナカミチ遺跡（志賀町）……………（11）

指江ジュウサンザカ遺跡（かほく市）……………（13）

多田ツルガタン遺跡（かほく市）……………（14）

加茂遺跡、能瀬南B遺跡（津幡町）……………（16）

大友A遺跡、大友E遺跡、直江西遺跡（金沢市）……………（18）

小立野ユミノマチ遺跡（金沢市）……………（20）

知気寺八反田遺跡（白山市）……………（22）

石子町ハサバダ遺跡（能美市）……………（24）

宮の奥経塚（小松市）……………（26）

平成23年度下半期の出土品整理作業……………（28）

調査研究

加賀市三木A遺跡の縄文土器と弥生土器……………久田 正弘…（31）

2012年12月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

小立野ユミノマチ遺跡

遺跡空中写真（西から）

小立野ユミノマチ遺跡は石川県立金沢商業高等学校の改築工事に伴い発見された。市内を流れる犀川と浅野川の間に囲まれた小立野台地上に立地する江戸時代の遺跡である。

墨書「吉村平太夫」

陶器鉢の底部外面に墨書されている。吉村平太夫は江戸時代末期の加賀藩士で、「山緒一類附帳」（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）によれば、「弓持・筒持足輕」をつとめている。



遺跡空中写真（西から）



墨書「吉村平太夫」

写真解説

宮の奥経塚

調査区全景（東から）

小松市北東部丘陵（能美丘陵）の平坦部に築かれた、11世紀後半から13世紀にかけての塚である。調査区北側に小山神社、西側の丘陵下には遊泉寺町の墓地があり、調査区より東側の丘陵下には、平安時代末期に起こった安元事件で知られる中宮八院の一つ涌泉寺があったと伝えられる。主要地方道小松辰口線が神社裏の調査区を抜け西へと造成される予定である。塚には葺石がみられ、地元では古くから漬け物石等に利用されていたという。

2号塚検出状況（東から）

しっかりとした周溝が巡る、約5m四方の塚で、裾近くに貼り付けた大きな平石が残っていた。塚部分の調査では石の入った土坑が検出されたが、経筒等の遺物の出土はなく、墓の可能性もある。塚上面は削平され、葺かれていたらしい川原石や凝灰岩片が多数残っていた。



調査区全景（東から）



2号塚検出状況（東から）

平成 23 年度の発掘調査から

所 長 三 浦 純 夫

平成 23 年度に（財）石川県埋蔵文化財センターは、石川県教育委員会から 20 件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの件数は、国土交通省が 3 件、鉄道・運輸支援機構が 1 件、最高裁判所が 1 件、県土木部が 11 件、県農林水産部が 2 件、県環境部が 1 件、県教育委員会が 1 件である。

本号では、23 年度に当センターが実施した発掘調査の概要を報告し（本誌前号で報告した遺跡は除く）、あわせて石川県金沢城調査研究所および市・町の発掘調査概要も紹介する。

1 石川県埋蔵文化財センターが実施した調査

しやういんこうじ
正院小路遺跡（珠洲市）は中世の集落で、掘立柱建物のほか道路と見られる遺構も確認している。

七尾城跡（七尾市）では、戦国時代の城下町の調査を継続しており、古屋敷町地内で掘立柱建物、櫓を確認し、竹町地内では石組井戸を確認した。

のの
千野遺跡（七尾市）は低丘陵に立地する遺跡で、弥生時代後期の方形周溝墓、古墳時代の竪穴建物、掘立柱建物を確認した。

花園・黒崎遺跡（七尾市）では、古墳時代、古代の集落を調査し、掘立柱建物、井戸を確認した。

福井ナカミチ遺跡（羽咋郡志賀町）は、福野低地（旧福野潟）の南縁に立地する古代の集落である。9 世紀の掘立柱建物 7 棟を検出し、銅製の巡方（じゆんぽう）が出土した。このほか、奈良・平安時代の製塩土器が大量に出ていることから、福野潟に入り込んだ海水を利用した製塩が行われていたことを確認した。

たんだ
多田ツルガタン遺跡（かほく市）は古墳時代、中世の集落で、中世では総柱の掘立柱建物を確認した。

あしよ
指江ジュウサンザカ遺跡（かほく市）は、丘陵に営まれた弥生時代後期の集落である。竪穴建物、土坑を確認した。

加茂遺跡（津幡町）では、古墳時代と平安時代の集落を確認した。隣接する能瀬南 B 遺跡（のせみなみ）では、古墳時代の須恵器窯を検出した。

あきとし
直江西遺跡（金沢市）では、弥生時代から古墳時代初頭の溝を確認し、ここから大量の木製品が出土した。これに近い大友 A 遺跡（金沢市）では古墳時代の集落、大友 E 遺跡（金沢市）では奈良・平安時代の集落の一端を確認した。

こたつの
小立野ユミノマチ遺跡（金沢市）は昨年度に続く調査である。調査箇所は加賀藩の重臣横山家の下屋敷および弓持・筒持の足軽屋敷にあたりとみられ、足軽屋敷の存在を裏付ける出土品に「吉村平太夫」と墨書した陶器がある。吉村平太夫は、江戸時代末期の加賀藩士で、『由緒一類附帳』（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）によれば、「弓持・筒持足軽」をつとめている。

あきとし
知気寺八反田遺跡（白山市）では平安時代の集落を確認した。

いじこま
石子町ハサバダ遺跡（能美市）は中世の集落で、掘立柱建物、溝、櫓などの遺構を検出した。

宮の奥経塚（小松市）では低丘陵に造られた 5 基の塚を確認した。いずれも平面方形で周溝をもっており、中央部に土坑がある。築造時期は、11 世紀後半から 13 世紀とみられる。

2 石川県金沢城調査研究所が実施した調査

金沢城の復元・整備のための確認調査が継続して行われている。

橋爪門では、「二の門」と「桁形」を復元するための調査を実施し、添柱痕跡、側柱・鏡柱の礎石根固め、橋石痕跡、石組溝・石組桁・木蓋付溝などを確認した。

玉泉院丸庭園では、滝石組周辺の精査と滝石組背後の石樋の組み込まれた「色紙短冊石垣」下の遺構確認を目的として調査を行った。調査の結果、滝石組周辺の石組みの変遷を確認し、「色紙短冊石垣」下で、石組や玉石敷をともなう滝壺状のくぼ地を確認した。石樋からの落水は、高さ9mの滝となるのが明らかになった。この庭園は、寛永11年(1634)に加賀藩三代藩主前田利常が京都から庭師を招いて作庭したと伝えられる回遊式庭園である。

3 市・町が実施した主な調査

鳳珠郡能登町の国指定史跡真脇遺跡は、平成19年度から実施していた第1期史跡整備事業が完成した。発掘調査は、縄文時代晩期の環状大溝の詳細を明らかにするために行なった。大溝は西側で幅3mと広く作られているが、東へ行くにしたがって浅くなっていることがわかった。

金沢市は、土地区画整理事業にともなう大友F遺跡の第2次調査を行なった。古墳時代前期と平安時代の集落で、古墳時代は、掘立柱建物、平地式建物、井戸、区画溝などを検出し、平安時代では、川や溝が出ている。古墳時代の出土品には、石鋼未製品、管玉未製品、石鋼を作るさいにできる「剣抜円盤」、砥石、緑色凝灰岩の剥片などがあり、この集落で玉作りが行われていたことが明らかになった。

金沢市内の近世遺跡の調査では、金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)、小豆沢ナガヤマ丁場跡、片町2丁目5番遺跡などがあげられる。金沢城下町遺跡(兼六元町7番地点)では、17世紀以降の井戸、土坑、石組溝などを検出し、古墳時代前期の大溝も明らかになった。小豆沢ナガヤマ丁場跡は、金沢城へ石材を供給した「戸室石切丁場」のひとつである。慶長・元和期の丁場と見られ、約40箇所の手掘り坑、原石の露頭などを確認した。片町2丁目5番遺跡は、寛文7年(1667)以降は、加賀藩主前田家直臣の武家屋敷であった。調査の結果、屋敷の境と見られる石積の溝や石垣のほか、井戸、地下室、池状土坑のほか、寛永大火(1630年代)にともなう廃棄土坑、礎石建物などを確認している。

加賀藩主前田家墓所では、前田利家の七女・村井千世の石廟基部の調査が行われ、河原石を方形に置いた基礎が確認された。

野々市市は、三日市A遺跡、二日市イシバチ遺跡の調査を行った。三日市A遺跡は古代・中世の集落で、古代では掘立柱建物、大溝を検出し、中世では室町時代の総柱掘立柱建物を7棟確認している。二日市イシバチ遺跡は、弥生時代と中世の集落で、堅穴建物のほか溝・河道を確認している。

白山市は横江荘遺跡で、「大型区画施設」の東側の長舎建物の精査を行った。この「大型区画施設」は、寺院や郡庁の可能性が考えられている。

小松市は、大川遺跡、銭畑遺跡、松谷廃寺跡などの調査を行った。このうち大川遺跡は、近世の小松城下町で、町屋と寺院、川跡が確認された。町屋は北国街道沿いに13区画検出され、土塁、溝などの区画施設、井戸、廃棄土坑などを確認した。寺院は曹洞宗の誓願寺で、安政2年(1855)に転出したことがわかっている。昨年から続く調査で、小松城下町の町屋・寺院の様相、土地利用の変遷などが明らかになった。

加賀市は、九谷磁器窯跡の整備にともなう調査を実施し、上絵付けの顔料となる「朱石」を粉砕した場所を確認した。このほか、大型聖域の整備に係る調査に着手し、本丸の櫓台、北虎口・東虎口などの確認を行った。

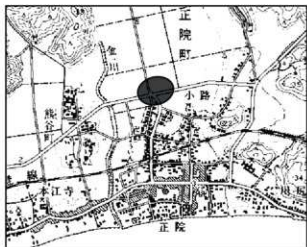
しょういんこうじ 正院小路遺跡

所在地 珠洲市正院町小路地内

調査期間 平成 23 年 11 月 10 日～平成 24 年 1 月 5 日

調査面積 870㎡

調査担当 久田正弘 河合秀樹



遺跡位置図 (S=1/25,000)



A地区並行溝 (北西から)

調査成果の要点

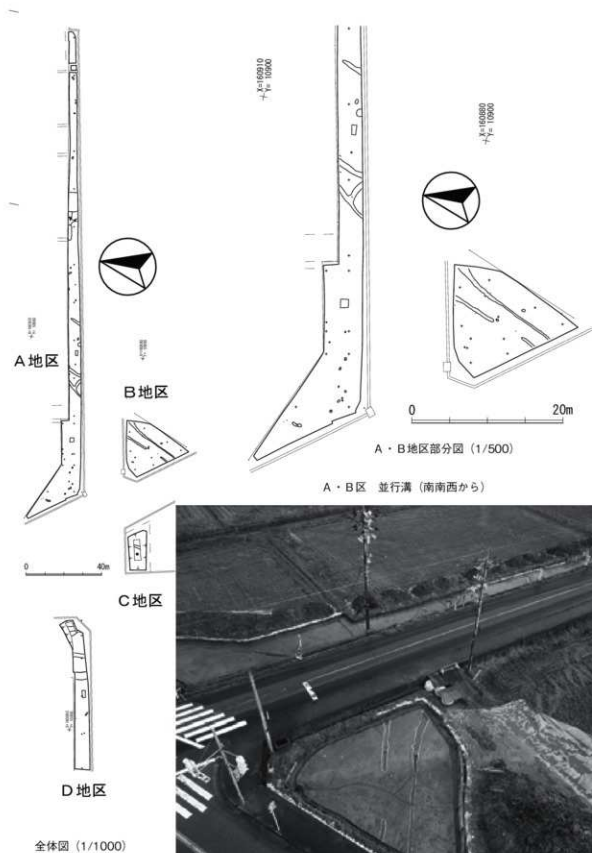
- ・古代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。

珠洲市正院町の北側に位置する遺跡であり、主要地方道大谷嶺飯田線道路改良工事に伴い、発掘調査を実施した。遺構密度は薄く、溝・小穴を検出し、中世の陶磁器類（珠洲焼主体）と古代の須恵器が出土した。

南東側のB地区では、北東方向に延びて行く2本の並行溝を検出した。溝の間は、南側1.7～1.8mであり、北側ではやや広く(2～2.8m)なり、やや曲がる傾向がみられた。その延長上に位置するA地区にも2本の並行溝があり、溝の間は南側2.9m・北側2.1mである。この溝群は道路状遺構の側溝の可能性が想定されるが、確証はない。C地区では古代の柱穴が検出されたことから、遺跡は現在の集落側に広がっていたと推定される。(久田正弘)



調査区全景 (北東から)

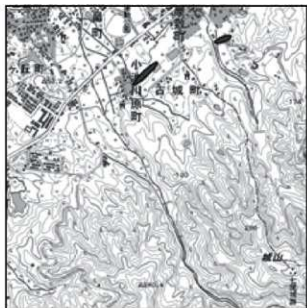


正院小路遺跡全体図など

七尾城跡

所在地 七尾市古屋敷町・竹町地内
調査面積 2,540㎡ (うち確認調査 290㎡)

調査期間 平成 23 年 5 月 27 日～同年 10 月 21 日
調査担当 中屋克彦 金山哲哉 安中哲徳 北村啓悟
魚水 環



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・木落川・庄津川各東岸部で、戦国期の集落跡を確認した。
- ・木落川東岸部で、石組・素掘りの井戸や多数の小土坑を確認した。
- ・庄津川～東沼田東岸部で、溝や竪穴状遺構、石組・素掘り井戸、柵、掘立柱建物、大小土坑多数を確認した。

七尾城跡の発掘調査は、一般国道 470 号能越自動車道建設(七尾水見道路)を原因として平成 17 年度より着手。以降、継続して実施され、本調査で第 7 次を数える。今回の調査は、平成 17～19 年度の確認調査を経て位置決定

された橋脚部、及び付随する市道建設区域を対象とする。調査地は、木落川東岸区域(P10区、P11区、市道区、付替市道区)と、庄津川～東沼田東岸部(付替河川区、上部工区、P1区、P2区、P3区、P4区、P5区)の2地点である。なお、P1区西側に設定した上部工区は工事の影響を受けないことから、遺構検出と同状況の記録のみを行った。

木落川東岸の調査区については削平により全体的に遺構密度が希薄であったが、P10区では、石組や素掘りの井戸、小土坑など多数の遺構を検出した。遺物は、土師皿、陶磁器などのほか、素掘り井戸の下層からは祭祀に用いたと見られる折敷や曲物、一輪差しなどの木製品が出土した。

一方、総構のすぐ外側に位置する庄津川～東沼田東岸部の調査区については、P2～P4区で削平により遺構密度のやや低い部分があったものの、P1区とP5区で良好な遺構面を確認することができた。P1区では10m四方の調査区内に、塀、石組井戸、竪穴状遺構など多数の遺構を高い密度で検出し、土師皿や陶磁器を主体に、刀の精尻や銅銭などの金属製品ほか多数の遺物が出土した。また、P5区でも素掘り井戸、柵、竪穴状遺構、掘立柱建物など多数の遺構を検出し、遺物は土師皿を中心とした土師器を主体に、越前焼や珠洲焼の挿鉢・甕、僅かではあるが鉄滓やファイゴの羽口などの鍛冶関連遺物も出土した。

今回の調査により、庄津川及び木落川の東岸域における戦国期の集落の展開状況や、過年度調査に比して僅かではあったが、東沼田東岸域に集住した鍛冶職人の活動痕跡を確認することができた。次年度以降の調査でも、戦国期の七尾城下町の実態が明らかになるものと期待される。(金山哲哉)



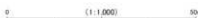
調査区配置図 (S=1/10,000)



P1～P5区遠景（北東から）



P1区遺構完掘状況（北西から）



平成23年度調査区
 平成17～22年度調査区



- ①: P1区
- ②: 上部工区
- ③: 付替河川区

P5区橋跡（北東から）

P11区

P11・付替市道区

市道区

P10区

P10区石組井戸（南東から）

平成17～23年度調査区遺構図・部分 (S=1/1,000)

千野遺跡

所在地 七尾市千野町地内

調査面積 1,000㎡

調査期間 平成 23 年 11 月 9 日～平成 24 年 1 月 10 日

調査担当 河合秀樹 中屋克彦 安中哲徳 北村啓悟
魚水 環



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図



遺跡遠景 (北西から)

調査成果の要点

- ・弥生時代の方形周溝墓を確認した。周溝からは、墳丘に供献されていたと考えられる、弥生時代中期後半頃の土器が出土した。
- ・古墳時代前期から中期頃にかけての竪穴建物や掘立柱建物を確認し、時期不明の土坑や道路側溝の可能性のある溝などを検出した。竪穴建物からは土師器がまとまって出土した。
- ・表土や包含層からは、弥生土器や土師器の他に、奈良・平安時代の須恵器や中世の珠洲焼などが多く出土したことから、周囲に同時期の遺跡が広がっている可能性が高い。

千野遺跡は、七尾城山の西斜面から西へ伸びた尾根先端部の標高約 25～27 m の場所に位置しており、尾根は周囲が削平されている。

調査は、国土交通省による一般国道 470 号能越自動車道建設（七尾水見道路）を原因とし、調査範囲は個人住宅の旧敷地周辺の竹や杉の山林であった部分にあたる。調査区は旧住宅の敷地を囲み、南側を A 区、北側を B 区と設定して調査を行ったが、密集して生える木の根や降雪が影響し、思うように進まなかった。



調査区全景 (南東から)

A区では、竪穴建物を4棟検出した。1辺約3～4m、深さ約10～20cmの方形ないしは長方形をしており、覆土からは、古墳時代前期～中期頃の土師器がまとも出土した。建物内には床面に焼土の痕跡が見られるものや床面からやや浮いた状態で焼土が確認できたものがあり、建物の建て直しが行われている可能性がある。また、竪穴内には柱穴は確認できなかった。

A区では他に、時期不明であるが、道路の側溝と思われる平行する溝が検出されており、表土や包含層からは土師器や須恵器、珠洲焼、銅銭などの遺物が多く出土したことから、古代から中世にかけての遺跡が周辺に広がりを見せる可能性が高いと考えている。

B区の方形周溝墓は、南北方向に長く、周溝内側で約12.5m×7.5mの長方形である。周溝は全周せず、コ字形である。溝は上幅で0.8～1.2m、深さ最大0.6mの逆台形に掘られており、後世の削平や攪乱により主体部及び墳丘盛土は失われている。周溝の底からやや浮いた状態で弥生時代中期後半頃の土器が出土しており、墳丘に供献されていた土器が転落したものと考えている。周溝北端部では、さらに北へ向かって溝が伸びており、また南西側でも1辺15m以上の周溝状の溝を検出していることから、周溝を共有して複数の周溝墓群が存在した可能性も考えられる。

近接するA区・B区で、遺構の配置・時代が異なることは、今後の課題であるが、調査区東側で予定されている次年度以降の調査で明らかになると考えている。遺跡周辺には、弥生時代の千野高塚遺跡や細口源田山遺跡、古墳時代の千野高塚古墳、千野1・2号墳、奈良・平安時代の古府タブノキダ遺跡、古府・国分遺跡、能登国分寺跡や千野庵寺など弥生～古墳・奈良・平安時代にかけての遺跡が多く点在しており、当遺跡との関連を今後も検討していく必要がある。(安中哲徳)



A区竪穴建物完掘状況 (南東から)



竪穴建物遺物出土状況



B区方形周溝墓完掘状況 (南東から)



方形周溝墓遺物出土状況

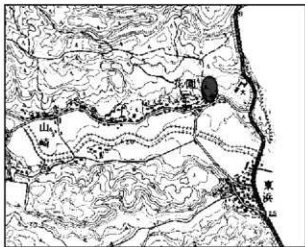
花園・黒崎遺跡

所在地 七尾市黒崎町地内

調査面積 1,400㎡

調査期間 平成23年8月25日～同年11月21日

調査担当 久田正弘 魚水 環



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・古墳時代後期～古代の集落であり、掘立柱建物や須恵器・製塩土器などを確認した。
- ・時期不詳の山道・井戸などを確認した。

七尾市南東部の黒崎町地内に位置し、一般国道470号能越自動車道（七尾水見道路）建設に伴い発掘調査を実施した。

丘陵の斜面と平坦面に立地する古墳時代後期から古代を主体とする集落遺跡である。平坦面は、地滑りによって形成されたものと思われる。西側にも続いているので、遺構も存在すると思われる。平坦面の標高は、29m前後であり、調査前は畑跡と杉林であった。

平坦面では、古墳時代後期から古代にかけての小穴・柱穴が多くあり、その場所は包含層も厚く、土器も多く出土し、掘立柱建物も出土した。時期は不詳だが、井戸・溝・落ち込みなどを確認した。また、近世以降と思われる区画溝が2組確認され、SD04・05とSD01の西側には、礎石と思われる石や石が抜けた小穴や埋塞などを検出し、大正期頃に存在した診療所跡の可能性もある。

斜面上側には、丘陵から続く逆台形状のSD09があり、斜面途中にはその溝に繋がる可能性がある平坦面（テラス上段・テラス2）を確認した。SD09の底には一部に硬化面が認められたことから、古代以降の山道と思われる。また、斜面裾のテラスでは柱穴が存在したので堅穴建物の存在も想定される。

出土遺物は、少量の縄文土器、7世紀代の須恵器・土師器を中心に、9～10世紀代の土師器などが出土した。尖底の製塩土器も出土しており、海岸部で塩づくりに携わっていた人々の集落と思われる。（久田正弘）



掘立柱建物



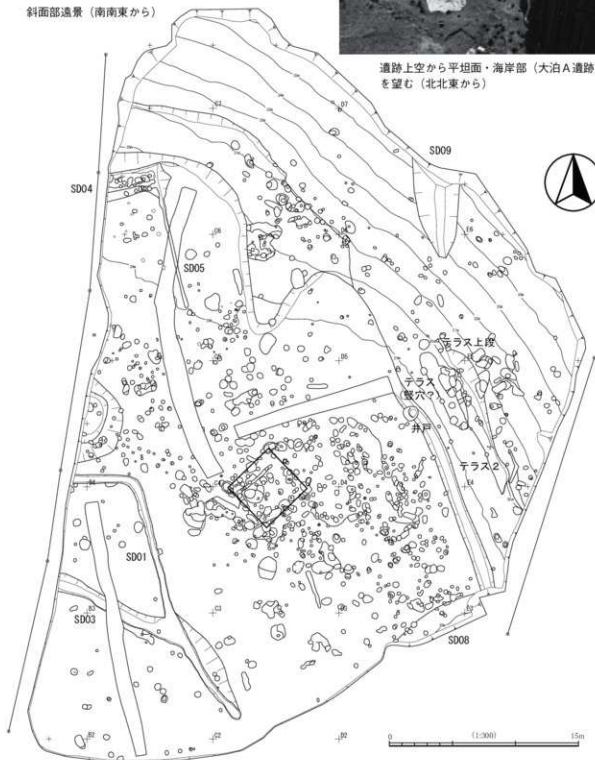
斜面部の平坦面



斜面部遠景 (南南東から)



遺跡上空から平坦部・海岸部 (大泊A遺跡) を望む (北北東から)



花園・黒崎遺跡全体図

福井ナカミチ遺跡

所在地 羽咋郡志賀町福井

調査期間 平成23年8月1日～同年10月13日

調査面積 1,200㎡

調査担当 北川晴夫 端 猛 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・奈良平安時代の集落跡を調査。掘立柱建物を7棟確認した。
- ・製塩炉と考えられる遺構を検出し大量の製塩土器が出土した。
- ・銅製の帯金具（巡方）が出土した。

福井ナカミチ遺跡は、旧福野湯の南側、眉丈山系から連なる低丘陵の裾に位置する。周辺には旧福野湯を取り囲むように縄文時代から近世まで多くの遺跡が存在する。

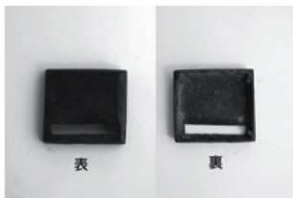
調査では、平安時代（9世紀後半頃）の集落跡を確認した。検出された遺構には7棟の掘立柱建物のほか、溝、土坑などがあり、出土した遺物には須恵器、土師器などがある。また、遺跡の西側からは製塩土器が大量に出土する溝状の遺構（SD101、SD107）が見つかり、同時に出土した大量の炭化物や土器の状況などから製塩炉が連なったものと判断した。製塩土器の中には能登で特徴的な実底のものは一点もなく、大型の平底タイプのものが見られる。旧福野湯の対岸にある米浜遺跡では両タイプが混在し、羽咋の寺家遺跡では平底のみが確認されている。これら周辺の遺跡との関連を明らかにする手掛かりとなろう。

さらに、調査区の東側から革の腰帯（鈿帯）に装着する銅製の帯金具（巡方）が出土した。奈良・平安時代の腰帯は官人装束の象徴とされており、その帯金具が出土したことから遺跡と官人との関係が注目される。ただし、帯金具そのものは8世紀代の可能性があり建物に直接結び付くかは検討を要する。なお、この帯金具には漆状の物質が付着しており、一般の役人が身につけたとされる烏油腰帯（銅の金具に黒漆を焼きつけたものを装着した帯）であったと考えられる。

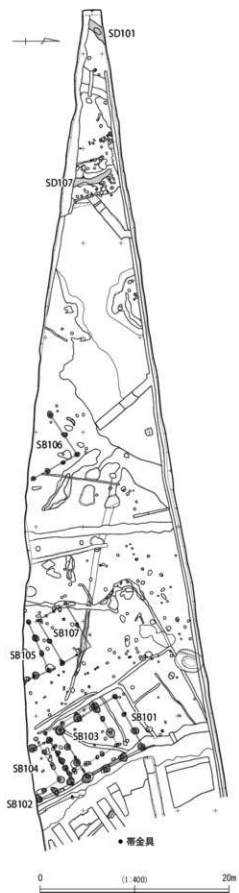
今後、出土品の資料整理や科学分析等を通じ遺跡の様相を明らかにしていきたい。（端 猛）



旧福野湯と福井ナカミチ遺跡（南から）



出土した帯金具（巡方）



福井ナカミチ遺跡遺構配置模式図 (S=1/400)



調査区遠景 (東から)



製塩炉の調査 (南から)



掘立柱建物 (南から)



帯金具 (遺方) 出土状況

指江ジュウサンザカ遺跡

所在地 かほく市指江地内

調査期間 平成23年7月6日～同年10月6日

調査面積 1,250㎡

調査担当 和田龍介 畑山智史



遺跡位置図 (S=1/25,000)

指江ジュウサンザカ遺跡は、かほく市南部の指江に所在し、標高約45mの丘陵上に位置する。周辺には古墳時代～古代の遺跡であり、古代の四面庇建物が確認された指江B遺跡、指江古墳群などが所在している。調査は、主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）建設事業を原因とし、同工事で開削される範囲を対象に発掘調査を実施した。

本遺跡は地形図・航空写真などから、東側にマウンド状の高まりと西側に平坦面状の地形が確認され、古墳に類似した様相が認められた。そのため、倒木等の除去後、現況地形測量を実施、人力での表土除去を行いつつ、地形確認トレンチを設定・掘削しながらの調査となった。

トレンチでの土層確認の結果、盛土・カット等の造成行為が基盤層上では認められないことや該期の遺物が出土しないこと等から、マウンド上の高まりと平坦地形は古墳でないと判断した。西側の平坦地形上には、弥生時代後期の土器を出土し建て替えの痕跡が認められる堅穴建物1基と、斜面下部で円筒土坑と思われる土坑1基を確認した。堅穴建物の切り合いも含め、本遺跡から出土する土器には時期差があまり認められないことから、同遺跡はごく短期間の内に営まれたものと考えられる。弥生時代の後期に、このような狭小な丘陵平坦面に少数の堅穴住居（建物）が営まれる例がかほく市南部の丘陵に点在しており、同地域の弥生時代後期集落のあり方として今後検討が必要であろう。

(和田龍介)



作業風景（斜面部トレンチ掘削）



調査区全景（手前が東）

多田ツルガタン遺跡

所在地 かほく市多田内

調査期間 平成23年10月7日～同年12月28日

調査面積 1,800㎡

調査担当 和田龍介 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

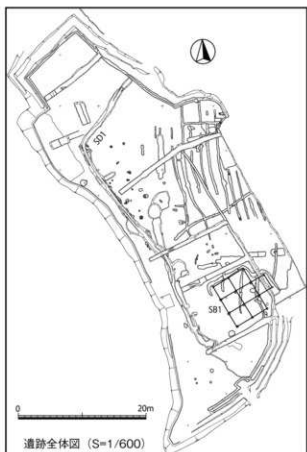
調査成果の要点

- ・中世の集落跡である。雨落溝を有する建物を確認した。
- ・遺跡の北端の下層で、古墳時代後期の須恵器が多量に出土した。

多田ツルガタン遺跡はかほく市の南方、多田内内の谷頭付近に所在する遺跡である。主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）に先立ち実施された分布調査によって確認された新発見の遺跡であり、同工事によって損壊する範囲を対象に発掘調査を実施した。

調査では、古墳時代の散布地及び中世の集落跡を確認した。遺跡の北側の谷頭にほど近い箇所で、中世の基盤層の下層から、焼け歪み・融着した破片を多く含む古墳時代後期の須恵器が多く出土した。調査範囲内に5本の下層確認トレンチを設定し掘削した結果、古墳時代後期の土器の出土は、調査区北端の低湿地状の範囲にほぼ限定され、当該時期の遺構などは確認できなかった。また焼け歪み・融着した破片が多いことから調査範囲内および近接箇所に古墳時代後期の須恵器窯跡の存在が想定されたが、下層確認トレンチおよび県教育委員会文化財課による分布調査によっても、工事範囲内に窯跡の存在は確認できていない。これらの土器は、近辺に所在する須恵器窯跡から投棄ないし流入したものと考えられる。須恵器は、遺跡南方の加茂遺跡で確認された須恵器窯と時的に同じか近いもので、今後比較検討が必要である。

中世では、北～東の丘陵裾に掘削された溝SD1の東側に、畝溝と思われる小溝群および掘立柱建物柱1棟を確認した。SD1は丘陵側



遺跡全体図 (S=1/600)

から流入する水や土砂から集落を防護する機能の他に、区画溝としての役割を併せ持っていたことが推定される。掘立柱建物SB1は東西2間×南北2間ないし東西2間×南北3間の総柱建物に庇が取り

付くもので、建物の北及び東側には浅い雨落溝が掘削されている。遺跡の南側という低地に建てられていることから、上手からの流水をとどめ、排水する機能を有していたと考えられる。その特徴的な構造等から、住居や倉庫といった一般的な性格の建物ではなく、仏堂や社のような特殊な性格を持った建物である可能性も一考する必要がある。（和田龍介）



調査区空中写真（手前が南）



掘立柱建物柱SB 1（手前が南）



下層須恵器出土状況（置き台か？）

加茂遺跡、能瀬南B遺跡

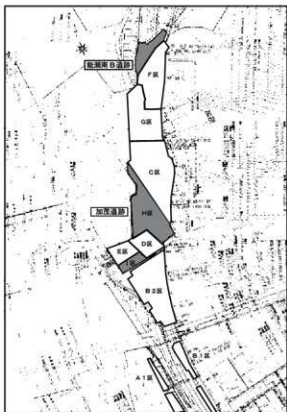
所在地 河北郡津幡町加茂・能瀬地内 調査期間 平成23年8月1日～同年12月28日
 調査面積 2,100㎡（加茂遺跡1,850㎡、能瀬南B遺跡250㎡）
 調査担当 布尾和史 荒木麻理子 木原伊織 林 亮太



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・加茂遺跡はその北東域にあたる2か所の調査区を対象に調査を実施し、主に古墳時代～平安時代と近世の集落跡を確認した。
- ・能瀬南B遺跡は、丘陵南側斜面を対象に調査を実施し、須恵器窯が部分的に遺存していることを確認した（加茂窯跡群）。また、斜面下層からは弥生土器や古墳時代の須恵器等が出土し、斜面下の谷部で土坑や穴を検出し、中世の遺物が出土した。



調査区位置図 (S=1/2,500)

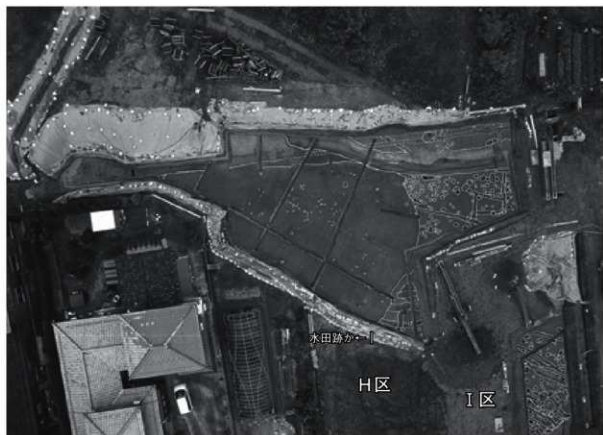
加茂遺跡は、河北潟東岸の沖積低地から丘陵端部に立地する。また、能瀬南B遺跡は加茂遺跡の北側の丘陵部に立地する。調査は、主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）の工事を原因とするもので、同路線に係る加茂遺跡の調査は平成17年度より継続的に行われ、能瀬南B遺跡の調査は今回が初めてとなる。

加茂遺跡 今回は遺跡の北東域にあたる2箇所の調査区（H・I区）を対象とした。

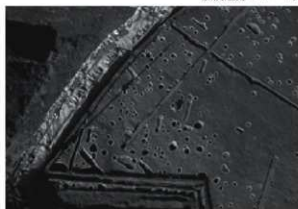
H区は2面、I区は3面の遺構検出面にて調査を行った結果、古墳時代～平安時代の集落跡を確認し、掘立柱建物、土坑、溝等を検出した。H区北側は低地部にあたり平面では明確に認識できなかったが、部分的ではあるが土層断面で畦畔状の盛り上がりが見られることや遺構面で足跡（人や牛など動物）と思われる凹みを検出していること等から水田跡の可能性が考えられる。

能瀬南B遺跡 丘陵の南側斜面の一部を調査し、須恵器窯が部分的（長さ約4m、幅約2m）に遺存していることを確認した。窯跡を検出した

段階であり、今後の窠体調査により内容が明らかになると思われるが、平成22年度に調査した古墳時代後期（7世紀前半頃）の須恵器窯と同一の窯跡群（加茂窯跡群）をなす。斜面下層からは弥生土器と打製石斧、古墳時代の須恵器が出土し、表土からは土師器皿多数が陶磁器とともに出土した。また、斜面下の谷部分では、土坑や穴が検出されており、中世の遺物が出土した。（土屋宣雄）



加茂遺跡：H・I区1面 遺構完掘状況



加茂遺跡：H区2面 遺構完掘状況（掘立柱建物）



加茂遺跡：I区2面 遺構完掘状況



能瀬南B遺跡：遺構完掘状況（竈跡検出）



能瀬南B遺跡（加茂竈跡群）：竈跡検出状況

大友 A 遺跡、大友 E 遺跡、直江西遺跡

所在地 金沢市大友町、近岡町、直江町地内 調査期間 平成 23 年 10 月 6 日～同年 12 月 21 日
調査面積 790㎡ 調査担当 中屋克彦 谷内明央 林 亮太 北村啓悟



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・大友 A 遺跡では、掘立柱建物、土坑、溝などを検出し、弥生土器、土師器、須恵器、木製品が出土した。
- ・大友 E 遺跡では溝や近世以降の川跡を検出し、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品が出土した。
- ・直江西遺跡では溝を検出し、弥生土器、土師器、陶磁器、木製品が出土した。弥生～古墳時代の溝 (S D 02) からは、多量の土器や木製品が出土した。

大友 A 遺跡、大友 E 遺跡、直江西遺跡は金沢港に近い低地に立地する。調査は県の水道用水利給事業に伴うもので、調査面積は大友 A 遺跡 290㎡、大友 E 遺跡 230㎡、直江西遺跡 270㎡である。

大友 A 遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物、古墳時代前～中期の土坑、溝、奈良・平安時代の溝などを検出した。掘立柱建物は 2 × 1 間で柱穴に柱根を伴うが、建物の大きさは確定できなかった。古墳時代前期の遺物が多く出土し、主にその頃の集落跡と考えられる。

大友 E 遺跡では、弥生時代後期の溝、奈良・平安時代の溝、近世以降の川跡などを検出した。B 区 S D 01 からは、土師器や須恵器、木製品がまとまって出土している。その他では比較的遺構が少なく、特に B 区以北は非常に軟弱な地盤に弥生時代の遺物が散布している状況であることから、集落の縁辺部と考えられる。

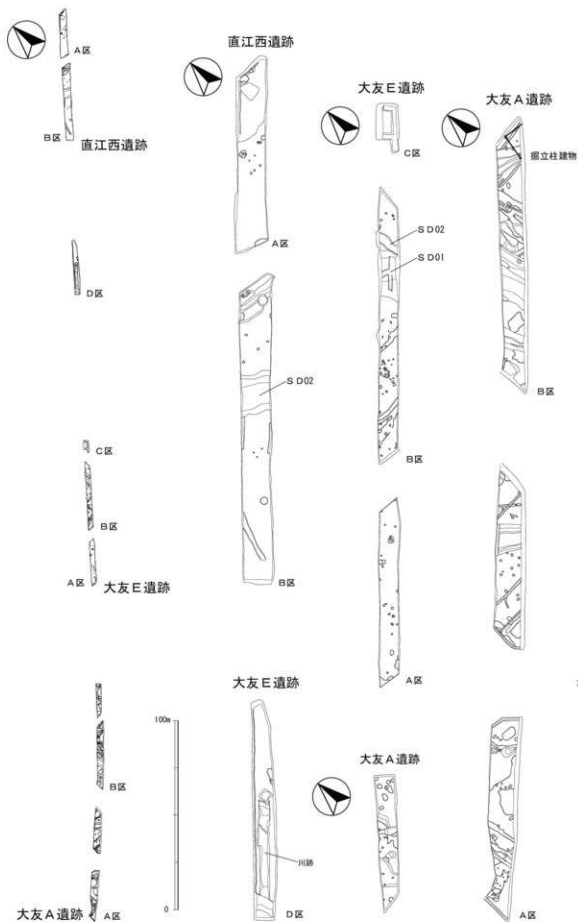
直江西遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の溝などを検出した。特に B 区 S D 02 から多くの土器や木製品が出土した。溝底から弥生時代中期末の土器も少量出土しており、木製品は一部に加工されたものが多い。遺跡本体は北東側に広がっていたと推定されるが、近・現代の攪乱・削平により、溝以外の遺構はほとんど確認することができなかった。(谷内明央)



大友 A 遺跡 B 区作業風景



直江西遺跡 B 区 S D 02 遺物出土状況



調査区位置図 (S = 1 / 2,000) と遺構配置図 (S = 1 / 500)

小立野ユミノマチ遺跡

所在地 金沢市小立野5丁目地内

調査期間 平成23年4月13日～同年12月14日

調査面積 4,620㎡

調査担当 谷内明央 林 亮太



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・遺構では、屋敷地を区画する東西方向の溝、礎石を伴う掘立柱建物、土取り穴、小溝群などを検出した。
- ・遺物では、肥前や瀬戸・美濃などの陶磁器、土師器皿、砥石・硯・行火などの石製品、銅銭や鉄砲玉などの金属製品が出土した。
- ・「吉村平太夫」の墨書があり、文献で幕末の弓持ち足軽にその名を確認できた。
- ・調査地は、江戸時代の絵図にみられる武家地の一角と考えられる。

本遺跡は、金沢市内を流れる犀川と浅野川に挟まれた小立野台地上に立地し、金沢商業高等学校敷地内に位置する。同校の建て替えに伴う発掘調査であり、昨年度に続き、今回で2年目の調査となる。昨年度の調査では、東西および南北方向の区画溝や塀、礎石を伴う建物、欄列あるいは掘立柱建物を構成すると見られる小穴、土取り穴、井戸、小溝群などが検出されており、肥前や瀬戸・美濃などの陶磁器や灯明皿として使用された土師器皿のほか、砥石や硯などの石製品、銅銭や煙管などの金属製品、筭・小玉などのガラス製品が出土している。

今回の調査では、屋敷地を区画する東西方向の溝、礎石を伴う掘立柱建物、土取り穴、小溝群などを検出した。昨年度に確認された東西52m×南北40mの区画から南へ42m離れたところで、今回新たに東西方向の区画溝を検出した。長さ73m以上・幅1.5m・深さ80cmを測る。西に向かって低くなっており、一部の溝底では小石が敷きつめられたような状態で出土している。その溝から北側で遺構が多く分布し、それより南側は土取り穴や小溝群を除き、遺構は少ない。

掘立柱建物は3棟確認した。そのうち1棟は「コ」の字状に柱穴を配置し、礎石を伴う。土取り穴には平面形が円形のもの、側面や底面の凹凸が顕著で形状にまとまりのないもの、溝状のものがある。平面規模17×10m・深さ2mを測る大型のものもあり、地山の黄褐色粘質土より下にある礫層まで掘られている穴も確認した。小溝群は南北・東西方向にのびており、切り合いから判断して时期的に最も新しい。溝幅50～60cm・深さ10～20cmを測り、調査区域の広い範囲で確認した。

出土物は18～19世紀のものが多く、現在のところ、区画溝や掘立柱建物は18世紀以降、土取り穴や小溝群は19世紀以降と理解している。

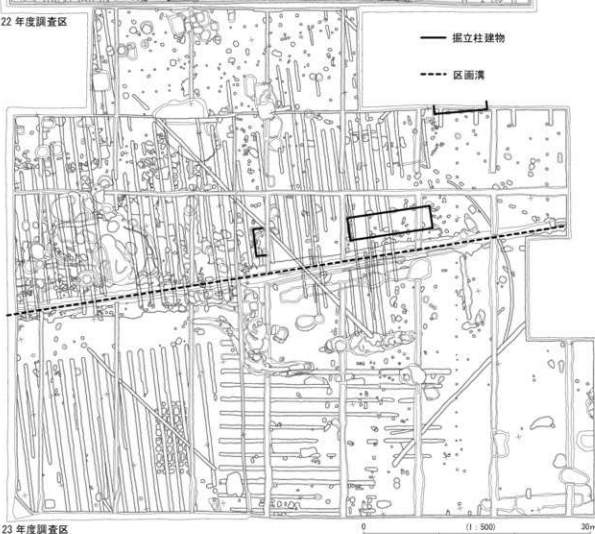
出土した陶器の中に「吉村平太夫」の墨書があり、当時の弓や鉄砲を扱う足軽などを記した文献「先祖由緒並一類附帳」にその名を確認できることから、今回出土した遺物には、当時足軽屋敷で暮らしていた人々が使っていた道具が多く含まれている可能性が高い。

江戸時代の絵図によると、調査地は加賀藩の重臣横山家の下屋敷および弓持ちの足軽屋敷が置かれていた場所にあたり、武家地の一角とみられる。

(谷内明央)



平成 22 年度調査区



平成 23 年度調査区

遺構配置図 (S = 1/500)

ち き じ はつ たん だ 知 気 寺 八 反 田 遺 跡

所 在 地 白山市知気寺町地内

調査期間 平成 23 年 11 月 1 日～同年 12 月 21 日

調査面積 1,390㎡

調査担当 北川晴夫 澤辺利明 畑山智史



遺跡位置図 (S=1/25,000)



遺跡遠景 (北西から)

調査成果の要点

- ・手取川扇状地扇尖部の微高地上に立地する平安時代中期の集落跡。
- ・掘立柱建物、土坑、畝溝を検出。

遺跡は、白山に源を発する手取川によって形成された手取川扇状地の扇尖部東側にあって、周辺の標高は 57 m 前後を計る。

本遺跡においては、平成 2 年度に行われたほ場整備にともない 200㎡ (幅 2 m、延長 100 m) の発掘調査が行われ、溝、ピット、平安時代中期の須恵器、土師器や製塩土器、羽口、鉄滓などが確認されている。

今回の発掘調査は県道鶴来美川インター線改良工事にともなうものであり、幅約 17 m、長さ約 80 m 間を対象とし、調査区東半において平成 2 年度の調査箇所重複する。

検出遺構・遺物は全般に希薄であり、主に調査区南側において掘立柱建物柱穴や土坑、畝溝等が確認され、須恵器、土師器が少量出土した。建物の規模や配置については具体的に把握できなかったが、伴出遺物からみて平安時代中期、なかでも 9 世紀後半から 10 世紀前半にかけてに位置付けられるものであろう。

また、調査での知見として、調査区北東側では拳～人頭大の円礫を多量に含む砂礫層が

広範囲に分布し、西および東端は地形が急に下降していた。遺跡の位置する手取川扇状地内一帯は、明治時代以降数度にわたり実施されたほ場整備事業によって広範囲に平坦化され、旧流路を元にしたといわれる七ヶ用水も整備され実り豊かな水田地帯となっているが、かつては、たびたびの氾濫を繰り返した手取川流域にあって、多数の支流、分流が存在し、谷状の微低地や島状の微高地が複雑に入り組んでいたものと推測される。調査により確認された旧地形や遺構分布からは、確認された集落が東西を低地とする自然堤防上に立地し、調査地より南方に延びる形で存在していたことがうかがわれるものである。その性格については、平成 2 年度調査の発掘調査報告書で示されているが、扇状地内への開発の進行・拡大にともない形成された農村集落の一つであった可能性を指摘しておきたい。

(澤辺利明)



調査区平面図 (S=1/400)



西半部完掘状況 (北東から)



掘立柱建物、土坑完掘状況 (北西から)



畝溝完掘状況 (北から)

いしこまろ 石子町ハサバダ遺跡

所在地 能美市石子町地内

調査期間 平成23年10月3日～同年11月9日

調査面積 750㎡

調査担当 北川晴夫 澤辺利明 畑山智史



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・弥生時代、中世の集落跡を確認した。
- ・河道から大量の弥生時代終末期の月影式土器が出土した。
- ・中世の掘立柱建物、溝、柵、竪穴状遺構などを検出し、これらは南北方向に配されていた。

本遺跡は手取川扇状地の一角に位置し、能美古墳群の中核をなす和田山・末寺山古墳群から南に約1km離れた、能美市石子町地内に所在する。調査は、一般県道と気寺井線の改良事業に伴うものである。

調査区西半では、河道が検出され、河道からは廃棄された弥生時代終末期の月影式土器が大量に

出土した。

調査区東半では、掘立柱建物、溝、柵、竪穴状遺構などを検出した。掘立柱建物、溝、竪穴状遺構から中世陶磁器が出土し、調査区東側では、中世の集落が存在していたことを確認した。

掘立柱建物は南北方向に配せられた柱穴3基を検出した。柱穴は径約60～90cm、遺構検出面からの深さ約40～60cmで、柱間は約4～5mであった。確認した柱穴が3基のため、建物の規模や位置については不明である。

溝は6条検出し、南北方向（溝2・3・6）と東西方向（溝1・4・5）の溝それぞれ3条ずつ確認した。溝の幅は約20～100cm、遺構検出面からの深さは数cm～約30cmであった。南北方向の溝は東西方向のものより後に作られていた。

柵は南北方向のものを2条確認した。柵は柱穴がそれぞれ6基（柵1）と7基（柵2）配されていたが、柱穴列はともに調査区外の南側へ延びる可能性がある。また柱穴列は交錯しており、柵は作り替えが行われたことがわかった。柱穴は20cm前後の隅丸方形を呈しているものが多く、遺構検出面からの深さが20～25cm前後のものが主体をなし、柱間は柵1が1.9m～2.1m、柵2が2.1m～2.3mで、後者が若干長かった。

調査区東半の先端に位置する竪穴状遺構は、遺構検出面からの深さが約10cmで浅かった。この遺構は調査区外に延びてすべては確認できなかったが、掘削状況から判断して、南北方向に配されていると推測できる。なお、この遺構の性格は不明である。

調査区東半で確認した中世の集落は、掘立柱建物、溝（3条）、柵、竪穴状遺構が南北方向に配されていたことから、東西南北の方角を考えて集落形成がなされていたと言える。（北川晴夫）



調査区遺構概略図 (S=1/500)



調査区遠景 (北東から)



調査区東側完掘状況 (北から)



調査区西側河道完掘状況 (南から)

みや おく 宮の奥経塚

所在地 小松市遊泉寺町地内

調査期間 平成 23 年 6 月 21 日～同年 10 月 31 日

調査面積 2,200㎡

調査担当 河合秀樹 山川史子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・丘陵平坦部に 5 基の塚を確認した。
- ・ 5 基のうち 3 基は以前に調査されたもので、2 基を新たに調査した。
- ・塚は全て方形の周溝で区画され、葦石が施されていた痕跡が確認された。
- ・出土した土師器や瓦質土器から、11 世紀後半から 13 世紀にかけての塚とみられる。

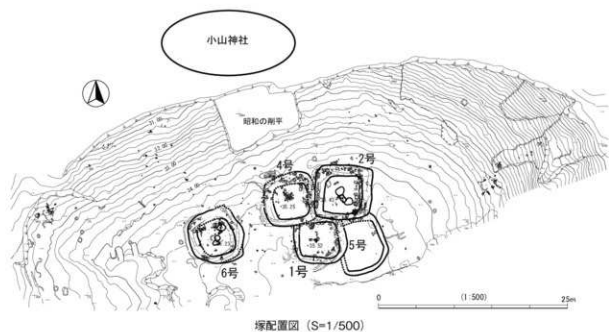
小松市北東部の、平野部を見下ろす丘陵上に位置する遺跡である。主要地方道小松辰口線の道路改良事業に伴い、遊泉寺町地内の小山神社裏手の丘陵上を調査し、標高 35 m の

平坦面に方形の塚が 5 基確認された。当初 6 基とみられたが、3 号塚は他の塚の石を動かし集められた地点と判断できたため欠番とした。

5 基のうち 1・4・5 号塚は、1953 (昭和 28) 年に上野与一氏らによって調査され、1 号塚からは「山吹双鳥鏡」に類似した和鏡が出土した。その文様や形態などから、平安時代後期から鎌倉時代前期のものと考えられる。今回新たに検出した周溝から、1 号塚の規模は東西 5.1m × 南北 4.6m、周溝を含めると 5.6m 四方となる。4 号塚は北側がかなり削平を受けており、残っていた部分から 4.5m 四方と推測される。5 号塚は最も後世の影響を受け、塚の形態がわかりにくく、検出した周溝から 5～6m 四方はあったとみられる。当時の調査で 4・5 号塚の内部には石組み遺構が検出されているが、1・4 号塚は中央部に一部石組みを残し、細く切った溝の中に石が据えてある様子が観察できた。

2 号塚は比較的塚の形状が残っており、東・西の側面には裾近くに 30cm 以上ある大きな平石が貼られ、それより上部に葺かれていたであろう川原石も多量に出土した。周溝はかなりしっかりと掘られ、塚が削平された現状でも溝底まで 80cm ほどある。また塚上面の盛土を除去し旧表土面で土坑を検出したが、石以外の出土品はない。6 号塚は北側が削平されていたが、東西 5m × 南北 5.5m の規模を呈する。塚上面には盛土から掘り込まれた灰入りの土坑や、一辺 80cm ほどの三角形の平石が乗った土坑 (旧表土面で検出) がみられた。また周溝脇から五輪塔の空輪輪が出土した。整形加工のみられる板石などは多いが、石造物はこの 1 点のみである。各塚の周溝から土師器や瓦質土器が、5 号塚の東側からは土師器片がややまとまって出土した。4 号塚斜面から小札破片が出土した他、釘などの鉄製品もみられる。また葦石や加賀焼の壺などの他、縄文時代後期の土器片や硬質頁岩片など塚以前の時期の遺物も出土している。

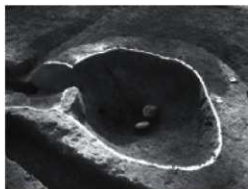
宮の奥経塚が立地する丘陵には、流紋岩質凝灰岩が多く含まれ、塚上の石にもそれらがみられる。近隣の鶴川石などもあり、地元の石を多く利用して塚を築いたことがうかがわれる。また塚の築造は切り合い関係などから、5 号塚→1 号塚→4 号塚→2 号塚・6 号塚の順ととらえられる。(山川史子)



塚検出状況 (手前左：2号塚、右：4号塚、奥左：5号塚、右：1号塚、下方が北)



1号塚に残る石組み



2号塚上の土坑

平成 23 年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は、上半期に引き続き道村B遺跡（白山市・平成22年度調査）、その後、高見スワノ遺跡（白山市・平成22年度調査）、加茂遺跡（津幡町・平成18年度・平成20年度・平成21年度）の整理作業を行った。

道村B遺跡の分類、接合は、同じ道村B遺跡の選別作業を1週間前に始めていた県関係調査グループと並行して行われた。もともと遺物の多い遺跡であったが、隣接する調査区ではお互いのグループの遺物で接合するものがないか探しあうことになり、膨大な量の遺物、個体を選別、接合するのは大変な作業であった。出土品は、弥生土器、土師器、須恵器、金属製品、石製品などで、胡桃のような形をした土鈴、暗文が施された赤彩の大きな土師器盤、甕、金属製の環状耳飾りなど目をひくものも多数あった。

高見スワノ遺跡は作業期間5日間で土器、金属製品の実測・トレース、遺構図トレースをおこなった。

加茂遺跡は3年度分の出土品の分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。出土品は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、青磁の碗など多様で、また、須恵器の窯が確認されたとのことで、焼成後に破棄されたのか、使える製品にならなかった非常に歪んだ甕、坏、蓋などが多数出土していた。

出土品の実測は木製品から行った。井戸杵の曲物が3つあり、そのうちの1つは2段組のもので、さらにそれを囲む正方形に組まれた枠も4辺全部そろっており、これら大型の木製品は気力、体力とも十分使って実測された。大型品を含めた木製品の実測に予想以上に時間がかかり、その後の土器等の実測、トレース、遺構図トレースを急ピッチのフル回転で行ったことでとても印象に残る整理作業となった。（小林多恵子）



井戸杵実測（加茂遺跡）



須恵器甕の接合（道村B遺跡）



馬具（甕）の実測（道村B遺跡）

県関係調査グループ

下半期は道村B遺跡（白山市・平成22年度調査）、米永ナデソオ遺跡（白山市・平成22年度・23年度調査）、北方池の下遺跡（珠洲市・平成23年度調査）、北出遺跡（白山市・平成21年度・22年度調査）、畝田・寺中遺跡他2遺跡（金沢市・平成20年度調査）の整理作業を行った。

道村B遺跡は上半期に続いて、土師器、須恵器などの実測・トレースを行った。特に多く出土した長胴甕のトレースは、外面のカキ目を丸ペンで何本も引く、細かい作業であった。米永ナデソオ遺跡は土師皿がとても多く、実測としては底部の糸切りの拓本をとることの繰り返しであった。

北方池の下遺跡は4日間という短い期間であったが、縄文時代晩期の土器中心の整理で、石罫・打製石斧などの石器もあり、急がなければならなかった。

北出遺跡は土師皿が多く、他に加賀焼、青磁などの陶磁器、石器、金属器、木器などの整理をした。羽釜の小さい破片もあったが、鈎の部分などは、最初は何かよく解らなかった。

畝田・寺中遺跡他2遺跡は個体数がとても多く、選別・接合の時間が足りなく思うほどであった。内黒の台付壺などの土師器が多く、須恵器は坏蓋・身が中心であった。甕も多く出土しており、外面に施されている細かい波状文は、実測・トレースともに緻密な作業であった。他に石器では、打製石斧、管玉未製品、紡錘車などが出土されていた。最後に遺構図トレースを行い、下半期の作業を終えた。（北野清美）

下半期の出土品洗浄は、平成22年度に調査した加茂遺跡出土品以外は、平成23年度に調査した七尾城跡や小立野ユミノマチ遺跡など14遺跡の作業を行った他、石川県金沢城跡調査研究所が調査を担当した金沢城跡の出土品についても行った。

（土屋宜雄）



土師器甕の実測（道村B遺跡）



土器の分類・接合（北出遺跡）



石器の実測（北出遺跡）

特定事業調査グループ

下半期10月半ばまで小立野ユミノマチ（金沢市・平成22年度調査）を継続し、その後、須曾ウワダラ遺跡他2遺跡（水白モンショ遺跡・中能登町・昭和60年度調査、須曾ウワダラ遺跡・七尾市・昭和60年度調査）、横江D遺跡（白山市・平成22年度調査）、八日市D遺跡（金沢市平成22年度調査）、金沢城跡（金沢市・橋爪門・平成22年度調査、玉泉院丸・平成22年度・23年度調査）の整理を行った。

須曾ウワダラ遺跡他2遺跡では、水白モンショ遺跡の出土品（土師器の高坏・甕・手づくね土器、須恵器の坏、中世陶器等）の記名・分類・接合、実測・トレース、須曾ウワダラ遺跡の遺構図トレースを行った。

横江D遺跡では、弥生時代の甕・壺・高坏・装飾器台、中世の青磁碗・すり鉢・甕等の他に、フイゴの羽口、下駄、曲物、木槌、硯、埋納遺構と思われるピットから出土した打製石斧の実測・トレースと遺構図トレースを行った。

八日市D遺跡は、主に奈良・平安時代の須恵器（坏、蓋、甕、横瓶等）・土師器（皿、長胴甕、鉢等）、少量ではあるが、縄文土器・中世陶磁器等の記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。

金沢城跡は、記名・分類と記名・分類・接合、実測・トレースの2本立てで行っていった。記名・分類は瓦の記名、器種や胎土、厚さ、刻印、瓦当の文様等による分類をした。瓦に加え、陶磁器、金属器（釘、銅銭等）、石製品（砥石・銅溝部材等）については記名・分類・接合、実測・トレースを行った。（横山そのみ）



土器の記名・分類・接合（横江D遺跡）



瓦等の分類作業（金沢城跡）



瓦等の分類状況（金沢城跡）

加賀市三木A遺跡の縄文土器と弥生土器

久田 正弘

1. はじめに

近年、北陸地方西部では縄文時代遺跡の調査や報告が少みられるようになり、また新たな視点による報告書刊行済み資料の再検討(向井など2012)も行われている。しかし、発掘調査報告書は、時間や予算的な制約などの為に全ての資料を報告することは困難である。また、刊行後に資料全体を再検討することも難しいことが一般的である。

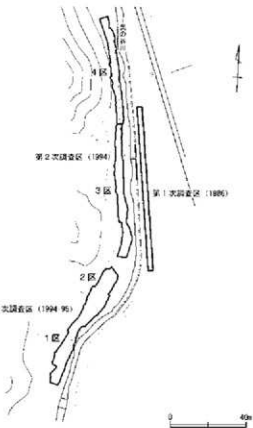
今回、加賀市三木A遺跡(第2図星印)出土の縄文土器と弥生土器の再検討を行い、それによって得られた新たな視点を提示したい。



第1図 三木A遺跡の位置



第2図 三木A遺跡と周辺の遺跡 (1/5万)



第3図 調査区位置図 (1/2千)

2. 遺跡の概要

加賀市南部の三木町集落の西側にある丘陵付近（第2図）に所在する遺跡であり、奥の谷川改修工事に伴う発掘調査が3回実施（86・94・95年度）された。旧石器時代から江戸時代の遺物が出土しており、縄文時代の遺物は丘陵裾から平野部（鞍部）で出土したが、遺構に付くものは少ない（石川県埋蔵文化財センター2009「三木A遺跡」）。よって、3回の調査であるが、近接した調査区（第3図）なのでまとめて報告する。3・7・13・15・16・19・27・34・42・46～48・51～55・69～72・74～77・82・83・85～87・90・92・93・100・101・104は今回新たに紹介する資料であり、それ以外の報告資料の中には一部修正したものが断つておく。

3. 縄文土器

縄文土器は、大きく6群に分けて分類したが、詳細はもっと細かく分かれる。

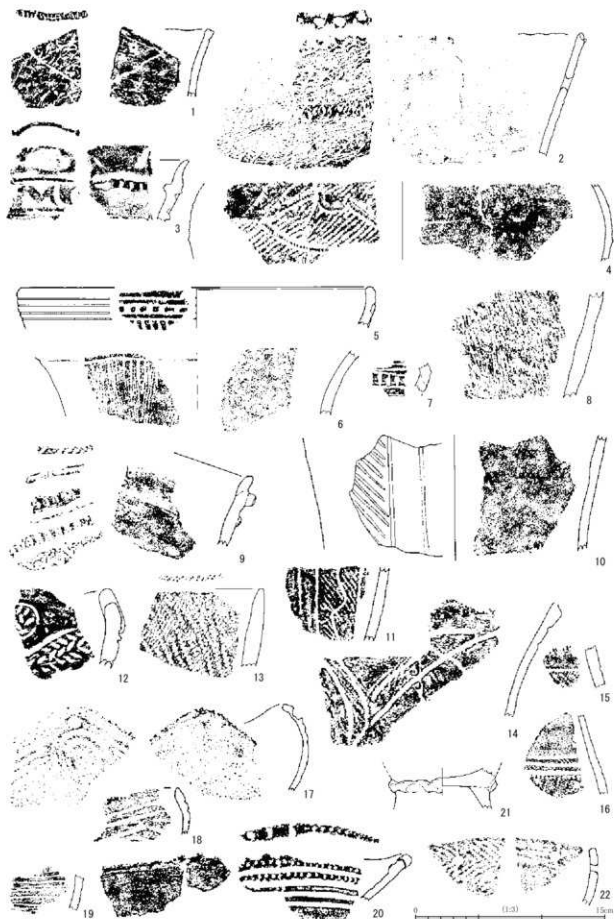
第1群土器（1～4） 前期に属する土器を一括した。1は早期末～前期初頭佐波式の波状口縁深鉢であり、口唇部には細い工具による刻みを持つ。2は前期前半の深鉢であり、胴部と口唇部に爪による刻みを持つ。棒などに巻きつけた撚糸を横位に施文する。3は、前期後半福浦上層Ⅱ式の口縁部である。口縁部内面に突帯を持ち、刻みを入れる。外面には鋸歯状と玉を取り巻く弧状の文様を持つようである。4は、近畿系の北白川下層Ⅲ式の深鉢胴部であり、縄文施文後に結節浮線文を左周りに施す。

第2群土器（5～13） 中期に属する土器を一括したが、5～8は中期前半、9～13は中期後半である。5～7はキャリバー型の深鉢であり、半截竹管文で施文する。6は、木目状撚糸文を持つが、口縁部文様帯の半截竹管文が胴部文様帯まで伸びている。8は深鉢の胴部であり、撚糸が施される。9は串田新式の波状口縁深鉢であり、2条の隆帯と口唇部には縄文による刻みを持つ。10・11は後半の深鉢胴部であり、木の葉状文などを持つ。12は大杉谷式深鉢の波頂部であり、綾杉文を持つ。13は中期後半の粗製深鉢と思われる、口唇部にも縄文を施文する。

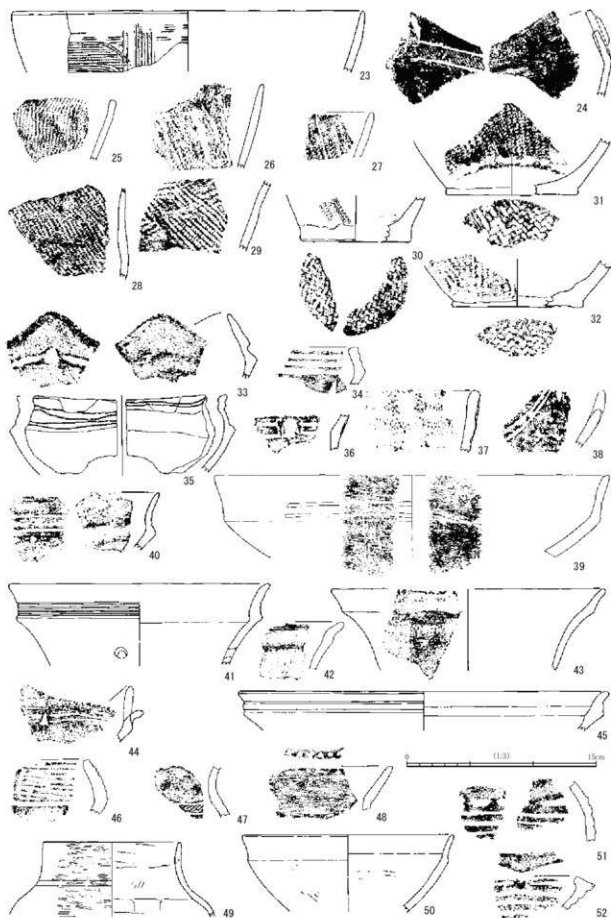
第3群土器（14～32） 後期前葉～中葉を一括した。14は中津・称名寺系の深鉢であり、先端が欠けている。15・16は細かいR L縄文を持つ。17・18は4波頂の深鉢である。20は加曾利B式系の浅鉢であり、内面に沈線と凹形刺突文を持つ。22は羽状縄文を持つ。23は櫛状具による文様を持つ。24は西日本系の深鉢であり、波頂部にはノの字状の隆帯を持つが剥がれている。25～32は、後期中葉に伴う粗製深鉢と思われる。

第4群土器（33～46） 後期後半～末を一括した。33～38は後半の井口式であり、39～46は後期末である。33～35は屈曲する口縁部を持つ井口式前半であり、36・37は扇形文を持つので後半である。41～46は八日市新保式であり、41～43は深鉢、44・45は浅鉢である。44は三角形楔文を持つので八日市新保Ⅰ式である。46は八日市新保Ⅱ式と思われる、口縁部が内傾する大形の浅鉢であり、工字文状に区画された中に平行沈線を充填する。

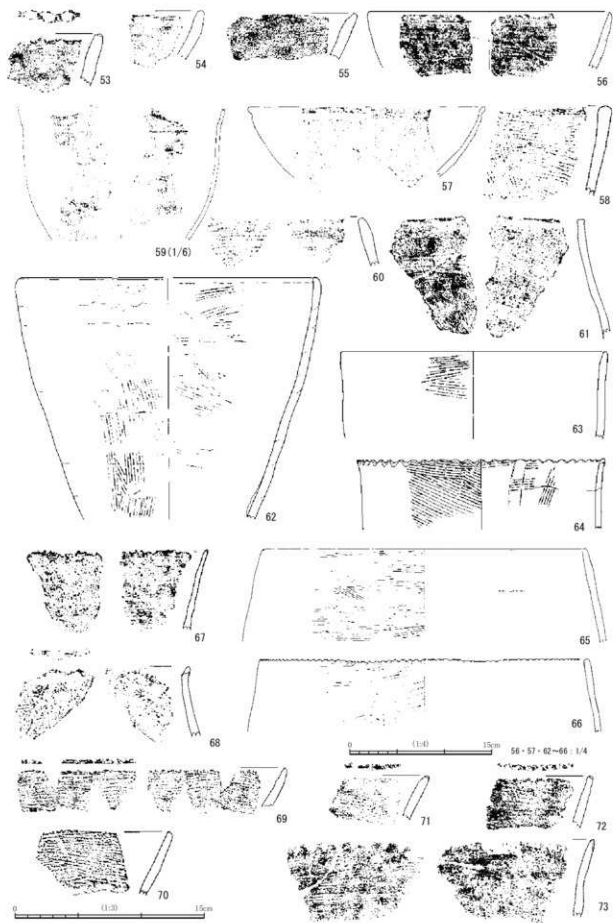
第5群土器（47～52） 晩期の土器を一括した。47・48は晩期中葉中屋式であり、47の上側には刺突文を区画文とし、48は粗製の字口縁深鉢である。49～52は晩期後半であり、49・50は西日本の突帯文系土器、51・52は東日本の大洞系浅鉢である。49は横方向のミガキを持つ壺であり、凹線状の沈線を持つが表現されていない。50は西日本系の研磨浅鉢であり、口縁部はやや長く外傾する。51の眼鏡状突帯は低く、胴部には平行沈線文ないし工字状文を持つと思われる。52も眼鏡状突帯文を持つが、口縁部と一体化しており、新しい様相である。



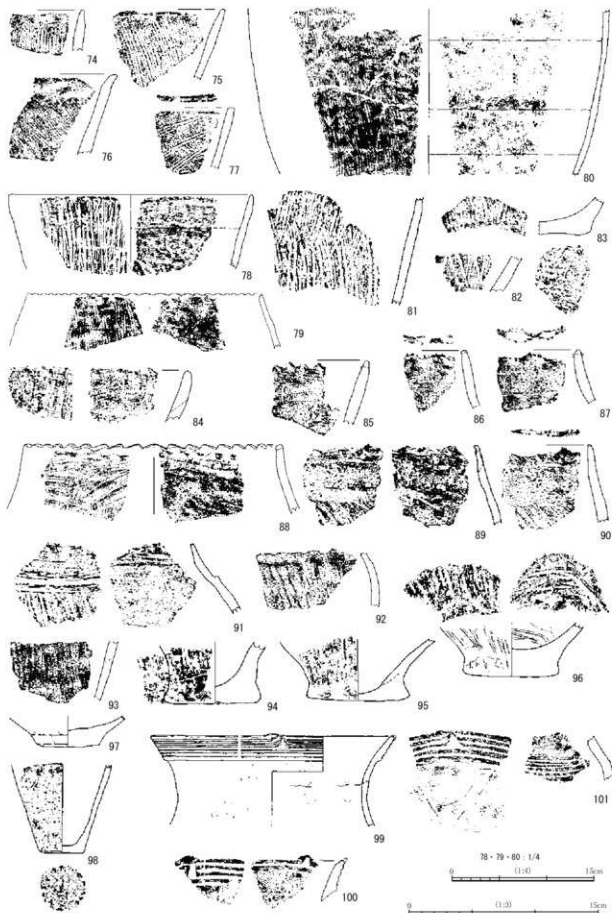
第4圖 三木A遺跡出土土器1



第5図 三木A遺跡出土土器2

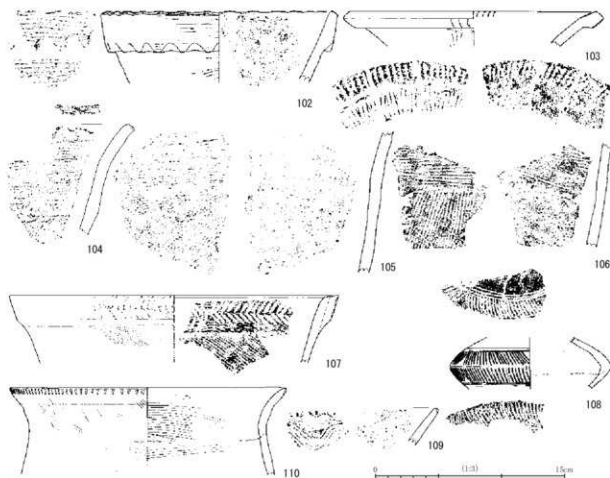


第6図 三木A遺跡出土土器3



第7图 三木A遺跡出土土器4

第6群土器(53~98) 無文・条痕などの粗製土器を一括した。53~55は少し器壁が厚く、古い可能性があろう。59は晩期前半の佐開式の深鉢と思われる。57は広口であり、口縁部に幅広の沈線を持つ。58は口唇部が厚くて丸いので後期中葉~後半であろうか。60は口縁部付近をやや厚くしている。61は口唇部を面取りして、波長部を持つようであり、佐開式であろうか。62は縦条痕であるが、口縁部にヨコミガキを行い、口縁部を短く内傾させる。63~66・69~73は、口縁に横条痕を持つものである。64・66・68は口唇部の刻みは指による。74~76は条痕の条の幅や深さが均一なものであり、口縁部を先細りさせるか、強い横ナデを施す。78~83は条痕の条の幅や深さが不揃いなものである。84は、外傾する口縁部に幅広く浅い縦条痕が施される。68・85~96は肩部以下に縦条痕を持ち、口縁部をナデ等により無文にする甕置式の深鉢である。肩部との境に何も持たない88や1条の沈線による段を持つ91がある。92・93は幅広で浅い条痕である。94~96は小さい底部であり、大きく開く体部を持つもので甕置式に特長的な底部である。98は無文のコップ型と思われる。



第8図 三木A遺跡出土土器5

4. 弥生土器

弥生前期から中期後半の土器を報告するが、後期の土器も出土している。99～101は柴山出村式の精製壺であり、水平な口縁部に4波頂の小さな突起が付く。平行沈線と括りを組合せて、工字文風の文様を描く。100は口縁部内面に沈線を巡らし、波頂部の内側に括りを入れる。101は精製壺の胴部であり、工字文風の文様を持つ。102～106は条痕系土器である。102・103は櫛状具による条痕を持つ壺であり、共に口縁部には幅広の突帯を持つ。104～106は同一個体の条痕文系壺であり、左下がりの条痕調整後口縁部を横調整する。108は山口県周辺からの搬入土器であり、色調は赤褐色である。時期は中期後半と思われる、算盤玉状の胴部を持ち、タマキ貝による文様を持つ。107は大型鉢であり、口縁部に幅広突帯を持ち、ハケによる綾杉文を持つ。109は口縁部に櫛状具による波状文を持つ。110は口縁部外面に強い横ナデを持つ壺である。

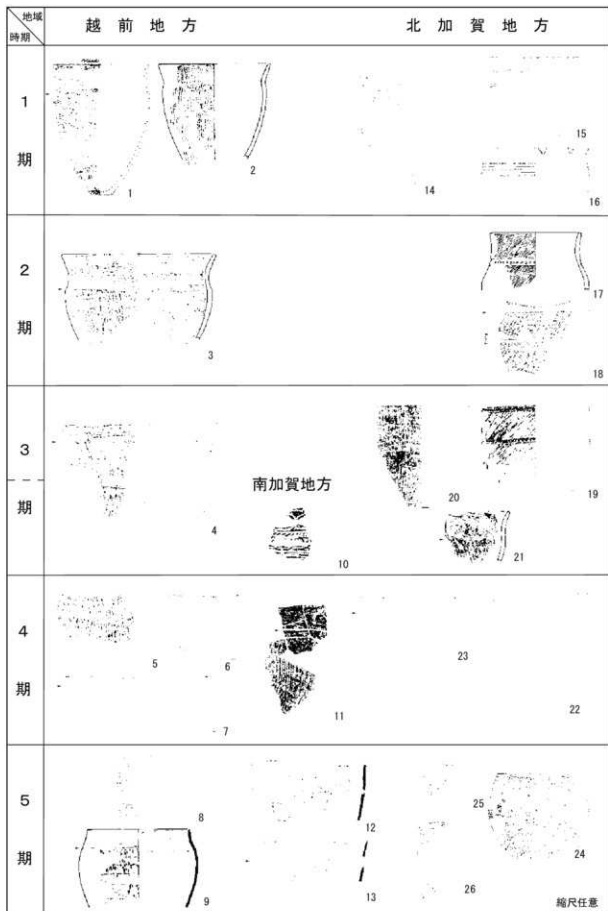
5. まとめ

この再検討により、新たに縄文時代前期後半の在地系土器(3)と晩期中葉中屋式(47・48)の資料が確認されたこと、さらに晩期後半～弥生前期前半の土器が充実した点に意義がある。晩期後半以降の土器の多くは粗製土器(63～98)なので、その内容をみてみたい。北加賀地方に見られる2条沈線間押し列点文など(第9図17・19・22)は見られずに、頸部以上を無文にする糞置式深鉢(68・85～96、豆谷1994)が多く、84のように幅広で浅くて丸い条痕も糞置式に特徴的である。そして、78・81などの不揃いな条痕も越前地方(第9図3・5)には多くみられ、65などの横条痕が多いのも特徴である。では、第9図を元に越前地方と加賀地方の深鉢の変遷をみてみたい。

第9図は任意の縮尺であり、注意を願いたい。時期は、1期大洞C2式前半併行、2期大洞C2式後半併行、3期大洞A式前半併行、4期大洞A式後半併行、5期大洞A式併行とする。全体の流れとしては、1期には晩期中葉の器形(くの字口縁で胴部が球形)の括れが弱くなり、縦条痕が主流になって行く。2期には、くの字器形の痕跡がほぼ無くなるが、口縁部は少し外反する傾向がみられる。3期になると、口縁部はほぼ直立気味になる傾向がみられ、4・5期には内傾するものが多くなる(第9図5・7～9・22・24)。しかし、同時期でもこの傾向と異なる個体(第9図6・11・25・26など)が確認されるので、器形=時期とは限らないことを断っておく。

三木A遺跡の土器は、49は2～3期、50～52は3～4期、99～100は5期であり、粗製土器も3～5期に伴うものと思われる。では、加賀地方の遺跡と比較したい。3～5期の白山市乾遺跡(岡本2001・湯尻ほか2010)では口縁部は横条痕が多く、5期の白山市八田中遺跡2次落ち込み(久田ほか1988)でも口縁部は横条痕が多く存在する。南加賀地方では、3期後半の土器(第9図10、浜崎ほか2004)が確認されるが、組成を明らかにするほどの資料に恵まれていない。4期の小松市千代遺跡89年B地区S X 01(北野ほか1992)では、口縁部は殆どが横条痕であり、糞置式深鉢(第9図11)もある。4・5期以降が主体の小松市八日市地方遺跡(福海ほか2003)でも口縁部は横条痕が多く、糞置式深鉢(第9図13)もあるが第9図11と同様に口縁部は外傾する。北加賀地方では、糞置系深鉢の出土は、金沢市チカモリ遺跡(第9図21南ほか1986)で1・2期とされたが、環状木柱列の再検討により3期(向井2012)に訂正された。乾遺跡では4・5期に区画沈線を持つものが1例(湯尻ほか2010-201)確認される。

越前地方は、1・2期主体の坂井市舟寄福島通遺跡(山本ほか2011)では縦条痕の口縁部をヨコナ



第9圖 深鉢変遷圖

デする第9図1などが確認され、福井市開発遺跡（第9図4、古川2012）と同じ器形も存在する。開発遺跡では、糞置式深鉢の粗形（第9図3）が確認され、糞置式は3期まで遡る可能性が指摘（豆谷1994）されているが、糞置遺跡の有文土器では遡ることは3期後半までが限度である。よって、有文土器と粗製土器の組み合わせにより、型式名（糞置式）をどこで切るかが今後の課題であろう。4期の福井市高柳遺跡SR-A01（第9図5～7）では、縦条痕が多く、横条痕は第9図6だけが報告されている。

よって、越前地方と北加賀地方の間に位置する南加賀地方では、晩期後半の資料は恵まれなかったが、小松市八日市地方遺跡と今回の資料を含めた三木A遺跡の報告によって、様相が明らかになりつつある。南加賀地方では、4・5期には半精製深鉢は越前地方の影響が強く、粗製深鉢は越前・北加賀地方の影響が強いことが判明した。

このように、報告書刊行後に資料の再検討を行うことによって、新たな視点が生まれて来るはずであり、今後の研究につながる事に期待したい。今回は、赤澤徳明、加藤克郎、田邊朋宏、土屋宜雄、端 猛、古川 登、米澤義光、吉田 淳氏から教示を得たがうまく生かせなかったことをお詫びしたい。

第9図版掲載土器 1・2：舟寄福島通遺跡、3・4・8：開発遺跡、5～7：高柳遺跡、9：糞置遺跡、10・12・13：八日市地方遺跡、11：千代遺跡、14～16：中屋サワ遺跡、17：真脇遺跡、18～20・22・23：御経塚遺跡、21：チカモリ遺跡、24～26：八田中遺跡

参考文献

- 岡本恭一 2001 『乾遺跡』石川県埋蔵文化財センター
垣内光次郎 2009 『三木A遺跡』石川県埋蔵文化財センター
北野博司ほか 1992 『千代』石川県立埋蔵文化財センター
高橋勝喜ほか 1986 『真脇遺跡』能都町教育委員会
田邊朋宏ほか 2010 『高柳遺跡』福井市教育委員会
浜崎悟司ほか 2004 『八日市地方遺跡』石川県埋蔵文化財センター
久田正弘ほか 1988 『八田中遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
福海貴子ほか 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
古川 登 2012 『開発遺跡Ⅰ』福井市教育委員会
豆谷和之 1994 『糞置式土器について』『文化財学論集』文化財学論集刊行会
南 久和ほか 1986 『新保本町チカモリ遺跡』金沢市教育委員会
南 久和ほか 1992 『中屋サワ遺跡』金沢市教育委員会
向井裕知 2012 『チカモリ遺跡における縄文時代晩期の建物遺構とその年代』『石川考古学研究会々誌第55号』石川考古学研究会
向井裕知・高田秀樹・木村勝彦・荒川隆史・西本寛・吉田淳・久田正弘・布尾和史 2012 『特集縄文時代晩期建物「環状木柱列」の年代』『石川考古学研究会々誌第55号』石川考古学研究会
山本孝一ほか 2011 『舟寄福島通遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
湯尻修平ほか 2010 『乾遺跡』石川県埋蔵文化財センター
吉田 淳ほか 1989 『御経塚遺跡Ⅱ』野々市町教育委員会
吉田 淳ほか 2003 『御経塚遺跡Ⅲ』野々市町教育委員会

石川県埋蔵文化財情報
第 28 号

発行日 2012 (平成24)年12月21日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 鶴川印刷株式会社

© 石川県埋蔵文化財センター

